

IAMAS における教育とその前提（いま、大学で学ぶこと）

Education at IAMAS and its premise

三輪眞弘

MIWA Masahiro

Abstract 大学の危機、そして人文科学の危機が叫ばれている今、ぼくは日本社会においてそれらが果たすべき役割は以前よりもさらに重要度を増していると感じている。そこでまず、「大学で学ぶこと」を考える上でのぼくにとっての「前提」を確認した上で、開学以来「芸術と科学の融合」を標榜してきた「IAMAS における教育」を自分自身がどのように経験してきたのかをまとめておきたい。それはまた、IAMAS という現実を題材にしながら日本の「大学」の「いま」を考えることにもなると思うからだ。

前提

ぼくには「この人なら、飛行機から地球上のどこに落としてもそこで生き延びて行けるだろう」といつも思う知人がいる。単に「尊敬している」と言わずにこんな表現を使うのは、彼には、たとえ言葉も通じない異文化の中にいきなり投げ込まれても彼なりの機転でその土地の人々を理解し、彼らから学び、親交を結び、信頼されるだろうと感じさせる不思議な迫力があるからだ。思考力があり、教養があり、（だから）発想が豊かで、（だから）コミュニケーション能力が高く、（だから）愛され信頼される。少し褒め過ぎかもしれないが、そのような人間に自分がなれたら、そしてそのような人を育てられたらそれは理想だと思う。なぜなら、どんな窮地に置かれても彼がいればその状況の中から必ず最善の道を見出し、事態に対処できると信じられるという意味で「無敵」だからだ。そしてそのためには、今挙げた異なる能力がひとりの人間の中でセットになっている、つまりそれぞれの能力が個別のものではなく、互いに深く結びついているという点を忘れてはならない。「人間的に成長する」とは、そういうことに違いない。そして他人から信頼され、尊敬されることこそがその証だろう。

いきなり知人の話を始めたのは、確かに大学は学ぶ場所だが、大学においてのそれは知識を蓄えたり技能を習得するというのではなく、「失敗から多くを学んだ」という時の「学び」であり、「人間的に成長する」ことを目指すものであることを確認したかったからだ。そのような意味において大学は複合的できわめて高度な「学び」の実践が行われる場所である。しかしこれは、「諸学問を究めるための場所」としての大学という世間一般のイメージとは異なるものかもしれない。あるいは昨今連呼されている「社会に役立つ人材の育成」ともまったく違う。そうではなく、世間で考えられているそれらの「大学の定義」が一体どこから来たのか、それは正当なものなのか、それは何のため、誰のためなのかを真正面から考え、議論する（ことの自由が許された）空間こそが大学なのだ。もちろん、この例を続けるならば、「大学の存在理由」を説得力を持って議論するためには十分な知識と高度な思考、

そして問題を読み解くための多様な視点が必要であることは言うまでもない。だからこそ様々な学問（専門分野）があり、その専門家たちが大学に集まっているのであって、その逆ではない。言い換えるなら、誰にとっても必ず「問題」が先にある。その「問題」は重大なものであればあるほど複雑で多層的であり、単独の専門分野の知識や技術で解決できるようなものはほとんどない。それは日本の原発問題ひとつをみても明らかだろう。まして、「問題」を「なかった」ことにすることなどできるはずもない。だがしかし（!）、驚くべきことに「なかったことにする」という判断が現実の社会ではあり得るのかもしれない。もしそうだとすれば、それはもはや学問の問題ではなく、人間としての「責任感」の問題である。

社会において、人生において、常に先にある複雑で多層的な「問題」を冷静に解説し、もっとも望ましい、チャンスのありそうな解法を人類の様々な「知」を駆使して見出していく場所、そして、そのようなことができる「人」を育てる場所が大学であり、それが大学の「存在理由」なのだとぼくは思う。ただし、そこに付け加えなくてはならないのは、あまりに当然すぎて言うのも恥ずかしいが、「人間としての責任感を持って」という言葉だろう。そしてもちろん、大学こそ、その「責任」とは一体何のことなのかを深く厳密に問い続ける場所である。先に”大学は複合的できわめて高度な「学び」の場である”と述べたのは、若い世代がこの「責任感」をも含めた「人間的な成長」を目指す場ということに他ならない。

ところで、このような「大学の定義」は何ひとつ目新しいものではなく、どんな大学の「建学の理念」にも謳われていたことではなかったのか。特集のタイトルのように、「学び」において「いま」と「むかし」に違いなどあるのだろうか。学問に限らず、あらゆる職能や技芸の習熟過程においても変わらぬ「学ぶ」という当然で普遍的なことが、今回なぜ「いま・・・」と改めて平仮名で問われているのか。むしろその「問うこと」自体を考えてみるの方が重要だろう。つまり、多くの大学の「建学の理念」が空疎な美辞麗句のようにしか受け取られず、その理想をまじめに考える大人が消えてしまったのは一体なぜか。近年「人材の育成」などと称して、突如大人たちが教育というものをまるで軍国主義時代の「教練」のように語りはじめたのはなぜなのか。いや、もちろん日本では「富国強兵」という時代的背景の中で大学もまた生まれたという歴史を知らないわけではないが、少なくとも大学は「人材」ではなく、新しい国家を担う「人」を育ててきたのではなかったか。ならば、これらの大きな変化はおそらく、この現代社会では、人々がこの「責任感」を見失い、「人間的に成長すること」を徹底的に嫌悪し、幼児化していく中で、「学ぶこと」の価値が自明なものではなくなったことの裏返しであるに違いない。そして、このような状況に対して「時代とともに人間も社会も変わっていくものだ」と信じる人ならば、おそらく「もう社会に大学などいない」、あるいは、経済発展のためにはやはり自然科学の研究だけは必要だと思うなら、「人文科学などいない」と結論付けるだろう。現に日本社会は「いま」、その通りになろうとしている。

私立公立を問わず大学をはじめとする教育機関は、ぼくたちの「社会のもの」である。そしてその社会を司る国家や自治体は営利企業ではない。つまり、企業のような短期的な経営「戦略」の繰り返しではなく、安定してこの社会が生き延び、人々が世代を超えて平和に暮らせるために知恵を絞り、それを実現していくのが国家である。その関係は、コンピュータにおける OS とアプリケーション・ソフトに似ている。つまり、大学は社会という「OS」の重要な一部だったはずだ。だからこそ、それはカルチャー・スクールや音楽教室、英会話学校などのサービスを提供する「アプリケーション」とは趣旨も目的も異なり、逆に「OS」の一部である大学の学生は当然、サービスを享受するお客様などであるはずがないのだ。し

かし、国家の莫大な借金や捨てようのない大量の核廃棄物の問題など（将来、国家そのものが倒産する、あるいは国土そのものが利用不可能になる危険）を前にして、近年両者の区別が曖昧になり、そこで使われる語彙までもが混同されているようにぼくは感じている。もちろんそれは、国民国家という「OS」そのものが、この電気文明の中で、もはや「アップデート」ぐらいでは追いつかないほど古びてしまっているということなのだろうが、それに代わる新しい「OS」については、また別の大きな話題とするしかない。

IAMAS における教育

19 年前、県立の専門学校として創設された IAMAS は初代坂根巖夫学長が掲げた「芸術と科学の融合」を開学の理念としてきた。そして、それをぼくは全面的に支持した。IAMAS のみならず、今までも様々なところで似たような標語や表現を目にしてきたが、しかし、現代社会において、これが「不可能なほど困難な理想」であることは、当時コンピュータ音楽の可能性に腐心していたぼくにもわかっていて、言うまでもなくそれは、自然科学と人文科学とに分断されたぼくたちの「知」のあり方の問題なのである。両者を取りあえず「ハイテク」と「アート」に代表させ、それらの表面的な「融合」として「メディア・アート」作品が生まれるという方便はわかりやすいし、他ならぬ IAMAS はそれによって世界的に知られるようになったわけだが、この問題の本質はそんな単純なものではない。以前、IAMAS 紀要第3巻でぼくは次のように書いたことがある。

科学と音楽/芸術、俗にいうなら理系と文系と言っても構わないが、これらふたつの領域の接点を見出し、ある種の「融合」を目指した取り組みが、当然のことながら、数多く試みられてきた。しかし、おそらくまったく異なるこれらの人間の「知のあり方」に接点など本当にあり得るのだろうか？ いや、そのように問うことはとても滑稽なことに違いない。なぜなら、“Art”の語源を調べるまでもなく、ぼくらの誰もが個々人において総合的な「ひとつの知」だけを頼りに日々を生きているからである。ならば、なぜ人間の知は分断され、互いにまったく異なるもののよう思考されなくてはならなかったのか？

（《アルゴリズム・コンポジションの（不）可能性》より）

今もこの自分自身の疑問にはうまく答えられないままだが、いずれにせよ、19 年前に IAMAS は新しい組織としてこの「芸術と科学の融合」という理念を断行した。すなわち、全員がそれぞれ異なる専門分野を持った教員チームの結成である。たとえば、作曲家のぼくの隣の研究室にはネットワーク技術の専門家がいて、その隣はデザイナーというように。それぞれが操る専門用語が違うのはもちろんだが、物事に対する感受性や発想の仕方も、仕事の進め方も、要するに「世界の常識」がまったく異なる「エキスパート」の集まりである。そしてもちろん、理系と文系の専門家を同じ場所に集めたからといって「芸術と科学の融合」が起きるわけではないし、自然に「共同研究」が始まるわけでもない。しかし、ひとつだけこれらの教員たちを強く結びつける共通項があった。「IAMAS における教育」である。教員と同様、まったく異なる専門を持った（あるいは持たない）、「今、目の前にいる」学生たちを具体的にどのように指導するのか、言い換えると、社会に出る直前の学生の人生においてもっとも貴重な2年間をこの IAMAS において実現させるには、学校としてどうしたらいい

のかという課題だ。これについてだけは専門が違っていても教員それぞれが持論や信念を持っており、互いに臆することなく話せる。話さないわけにはいかないのだ。当然、「文系の常識は理系の非常識」のようなことが顕在化し、意見が衝突することもあるれば、逆に「学ぶこと」に対するまったく新しい視点を同僚から「学ぶ」ことも少なくない。

ここからは主に 2001 年以後、大学院での話だが、そもそも、芸術（アート）作品と理系の研究成果を同じ「メディア表現研究」として「同等に」評価し、修士作品として「公平に」審査できるのか。そもそも、芸術とデザインは同じものなのか。そもそも、デザインやプロダクトを「研究」という型にはめること自体に意味があるのか。結果が優れたものであれば十分ではないか。そもそも、学術的な研究も含めた IAMAS が言うところの「作品」とは何のことなのか。本当に必ず論文が必要なのか。そもそも、芸術は「研究」なのか、等々。今でも議論が紛糾すると話は昔ながらの「そもそも」だらけになる。そして、この議論を飽きずに 10 年以上続けてきたということになる。さらに、これらの「そもそも」に加えて開学以来不変の IAMAS の問題、たとえば「専門性の扱い」などの議論もある。言うまでもなく、大学院は学部で学ぶべきことを広く学んだ上で、自分の専門をさらに深める場所であるはずだ。その一方で、文系/理系の分断、いびつな専門性（自分の専門以外のことに対する極端な無知、無関心）の弊害を克服していくことが、IAMAS の理念・根幹だったはずだ。ならば、大学院なのに専門性は深めなくても良いのか。何でもそこそこ上手だが、専門家にはなれないような中途半端な人を育てても良いのか、という批判である。もちろん、それで良いはずはない。

いずれにせよ、これらの議論では今でも明快な意見の一致には至らない。しかし「教員チーム」はこれらの問題を常に共有し、互いの（異なる）意見は尊重されてきた。また、長年このような議論が続けている間に、ある種の「暗黙の合意」のようなものが生まれてきた。たとえば、学生の指導がどれほどの困難に直面しても、ひとたび学生を受け入れた以上「決して学生の資質のせいにはしない」という合意は、教員対学生数だけをみれば「日本で一番恵まれている大学」として当然かも知れないが、何より、「自分の専門外のことについてもはっきり思ったことを述べる」。つまり、教員はもとより学生に対しても、自分はその分野の専門家ではないからといって問題を「丸投げ」にしてはならない。逆に（それぞれの専門分野からみれば）素人の幼稚な質問でも、見当違いの批判でも、専門の教員（学生）には「門外漢」に対してもきちんと理解可能な説明が要求されるという了解のことである。

もちろん、教員たちの考え方がいつまでも不一致のままで良いはずはないが、少なくとも IAMAS は、たとえば学長ひとりが未来のビジョンを提示し、その指揮の下に教員たちが一丸となってそれを実現するというタイプの組織ではないようだ。その真反対である。教員の誰もがミーティングの席を離れれば、それぞれの専門分野で勝手に、そしてフルパワーで活動が続いている。そのような複数の世界、価値観が地方都市にあるこの小さな学校に集積し、活発にうごめいている状態こそ、「大学」という、この社会に設けられた特別な空間の中でしかあり得ない、もっとも大学らしい姿なのではないか。アンケートに答えて学生は言う。

「先生がみな違う意見を言うのでどうしたらいいかわからない」と。それこそが IAMAS の魅力である。すでに選挙権を持っている学生は「自分の頭で考え」、自分の責任ですべてを判断するしかない。そして、それが良い。真剣でさえあれば、大学での「失敗」は許され、そこから「学ぶ」ことが出来るからだ。修士作品・研究において、まじめな学生ほど異分野の教員の「率直な」質問や助言によって幾度も大混乱の中に突き落とされ、そのたびに担当の教員によって救われるという過程を経て卒業していく。

もちろん、それが学生の「人生においてもっとも貴重な2年間」たり得たかは、まだ卒業生たちが若すぎるのでわからない。しかし少なくとも IAMAS は、いわゆる理系と文系とに分断された「知」の回復を夢見て、複合的で高度な「学び」の場から信頼される「人」を育てようとしてきた。その結果、岐阜県が設立した、このちっぽけな学校は世界的に知られるようになり、わずかな数の教員と卒業生たちの活躍が幅広い分野で認知され、少なからぬ卒業生が今では次世代の学生を指導する立場からこの社会に貢献していることは現時点でも明らかなのではないかな。

「人材」はその能力を発揮できる限られた場所でしか価値がない。しかし「人」はいつでも、どこでも固有の価値と可能性を持っている。この危機的な社会状況の中で、何をおいても、ぼくたちは「人」を育てていく以外に希望はない。生き延びるために。



図 1. おそらく今ではこのひとつしか残っていないであろう、開学時に作られた IAMAS オリジナル・スリッパ